

NETT

North East Think Tank of Japan

No.17
1996.12



特集

'96地域シンポジウム
～札幌・仙台～



ほくとう総研

NETT

CONTENTS

No.17
1996.12

1 ●羅針盤◆「創造と挑戦」の風土づくり
北海道経済連合会会長 戸田一夫

●特集●

'96地域シンポジウム

◆札幌会場 2
開催日：平成8年11月14日（木）
テーマ：北海道の産業戦略を考える
基調講演：21世紀の日本の産業構造と
北海道の産業戦略について
通商産業省顧問 堤 富男

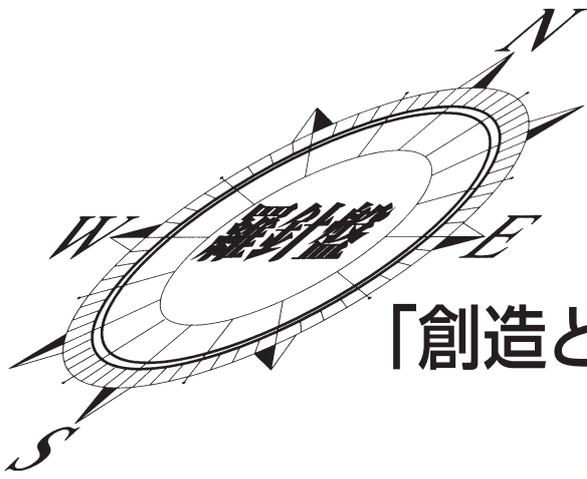
◆仙台会場 9
開催日：平成8年11月29日（金）
テーマ：2050年の東北
基調講演：東北のみらい
東京大学名誉教授 木村尚三郎

18 ●連載◆ほくとう日本のひとびと/14
石原莞爾～確たる「思想」をもった陸軍軍人
ほくとう総研 理事長 窪田 弘

●コラム◆リレーエッセイ◆ 21
ギャラリー村岡代表 村岡武司

22 ●連載◆地域づくり/6
源氏物語アカデミー～福井県武生市
ほくとう総研 専務理事 高田 喜義

●ほくとう総研のページ 24
事務局から・ほくとうDIARY・編集後記



「創造と挑戦」の風土づくり



北海道経済連合会会長 戸田一夫

本年は、衆議院解散総選挙での争点となった「行財政改革」に代表されるように、戦後50年以上続いた各種社会システムの行き詰まりや疲労に対し、国民挙げて、対処なり処方必要性を噛み締める契機となった年であったように思っております。また、北海道においては、国の次期全国総合開発計画の策定作業が進行する中、新国土軸や首都機能移転問題など、広く道内で、「北海道の役割」を論議させていただきました。一方、中央の方々とお話させていただいた中で感じましたのは、国家財政の逼迫、そして、日本全体から見た北海道の位置付けの低下であります。特に、北海道のことを良く理解されている方々からは、「今後しばらくの間、中央の目は、沖縄に向く。北海道には、かなり無関心だ。」という風に言われております。北海道にとりましては、正念場を迎えていると言えます。現在のような景気状況が、単なる好・不況といった景気循環における一過性の現象ではなく、産業構造のあり方そのものに起因する以上、北海道の生きる道もまた根本から考え直さなければならないと思っております。北海道開拓使設置以来、資源供給基地という大きな役割を担ってきた北海道ではございますが、経済のグローバル化の中で、新たな役割を問われているのだと思います。本道自体の産業構造の高度化は勿論のこと、食料基地としての役割をはじめ、空港を核とした日本の国際化の窓口として、また、災害面での危機管理を想定した国土造りや、ゆとりある生活環境面の受け皿としてなど、世界や日本の中での北海道の役割が多々有り得ると考えております。この命題への方策の一つとして、私どもは、「産業クラスターの創造」という戦略的産業政策を構築すべく努力しているところでございます。クラスターとは、「群れ」や「房」の意味で、「産業クラスター」は、取引・技術・情報・資金・人材の面で連結した産業群を意味します。産学官の連携の下、企業と地域がプレーヤーとなり、協働と競争によって、「創造と挑戦」の風土を作り上げようとするものでございます。このヒントを得ましたのが、今やEU北部のノウハウ集積地として、化学・電気・機械・通信産業にまでの広がりを持つ、フィンランドのオウル地域です。ここでは、核となる産業・企業・大学が集積を呼び、クラスターが成長しております。つまり、「産業クラスター」は、地域を苗床として成長する「木」であると言えます。そのためにも、まず核となる産業、「クラスターの芽」を探さなければなりません。現在、私どもは、まだこの段階でございますが、この産業クラスターを成長させることによって、道内市場を拡大・活性化でき、北海道の域際収支を改善することができます。また、雇用が増加することによって、優秀な人材が流入し、交流人口の増加も期待できるなど、好環境の循環が可能になると考えております。北海道にとっては、あらゆる意味で、来年が重要な年になります。国の開発計画での位置付け、首都機能移転先の選定、新千歳空港整備の可否、北海道新幹線の行方など、本道が当事者として係っている重要課題への方向付けが決定される年であります。私ども経済界も、各課題克服へ向け、全力で取り組んでまいりますので、関係各位のご理解、ご支援を、この場をお借りしてお願い申し上げます。

北海道東北開発公庫及び(財)北海道東北地域経済総合研究所の主催により「北東公庫創立40周年記念'96地域シンポジウム」が、札幌市及び仙台市を会場として開催されました。本号ではその中で両会場の「基調講演」を抄録としてご紹介します。

<札幌会場>

開催日：平成8年11月14日(木)

開催場所：ホテルニューオータニ札幌「鶴の間」

テーマ：北海道の産業戦略を考える～自立的経済発展をめざして～

21世紀の日本の産業構造と 北海道の産業戦略について

通商産業省顧問 堤 富男

本日のテーマは「21世紀の日本の産業構造と北海道の産業戦略について」ということですが、この大問題にどのような貢献ができるか考えてみました。初めに日本全体の動きについて、いま日本経済全体がどのような環境の下に置かれているのか、そしてどういう政策が取られようとしているのかをご紹介させていただきながら、その過程の中で通産省が産業戦略を過去に考えてきたときの手法というのがにじみ出ればご参考になるのではないかと考えております。その後で北海道の今後の経済戦略、産業戦略を考える上で、私が気のついた点を4、5点申し上げたいと思います。

<通産省の産業戦略手法>

通産省が産業戦略を考えるときの手順は非常に単純です。まず第一に内外の環境がどのように変化しているのか、それにどのようにフィットしているのかということ、内外環境の変化を頭に入れながら施策を考えていく。その内外変化の中で、何が日本に問題があるのか、その問題の抽出というのが第二工程に入ってくる。その裏側として、どのような対策を取るべきかということが出てくるわけです。対

策には色々ありますが、どのような産業が伸びていくのかということを考えるときには、どのような需要があるのか、供給体制はあるのか、いま自分のできることに、そして将来何が欲しいのか～「ニーズ」と「シーズ」は何か～というのを考えながら、産業戦略を考えていくわけです。

1. 内外環境の変化

戦後50年たちましたが、日本の戦後40年間は大変ラッキーな条件が続き、その中で日本の経済・産業



が育ってきたわけです。しかしその状況がこの10年間でガラリと変わっております。

アメリカという非常に素晴らしい国があって日本を育ててくれた。あるいは米ソ政治対立の中で、日本が困ると日本側を西側結束優先という形で抱えてくれた。他方で南の国、東の国々の中には経済、特に工業化については深い眠りに入っていたという条件があった。国内的には均質の、高レベルの労働人口は増え、また海外からは技術導入ができた。さらに高貯蓄の経済を運営して素晴らしい成果を得たわけです。

その結果G N Pは世界第二位、一人当たりですと第一位、世界一の長寿国、健康保険は皆保険。年金も素晴らしい制度があるわけですし、海外旅行も年間1,500万人、税金も間接税では先進国で一番安く、所得税は700万円までは税金を払わなくてもいい等、素晴らしい国づくりがあったと思います。

私は、この国づくりの良さの中で、内外変化がおきているにも拘わらず危機感を感じないということが実は危機であると思っています。それは、今起きていることは、私は日本経済にとってバイタル、クリティカル、命に関わることであると思っていますが、肝臓の病気のようにその痛みが今われわれの周りにすぐには出てきていないからではないか、危機が迫っていることを忘れていることが日本の現在立ち向かっている問題点ではないのかと思っています。東西冷戦時代というのが戦後だとすれば、今は世界全体が経済で大競争する時代になったわけです。「長い眠り」といわれる南のアジアについてはあつという間に工業化が進み、「空白の10年」という言葉がいわれておりました中南米でも、今やブラジル、アルゼンチンなど工業化に向かっている動きは大変激しいわけです。東欧諸国も目が覚めたような感じがしております。

同じような商品を非常に安いコストで作る国々が

世界全体で出てきたのです。戦後、われわれが何をやってきたのかというと、国際的に「貿易の自由化」ということです。関税を安くするというだけではなくて、経済について国境をなくするという努力を続けてきたのです。先進国同士の中では日本は追いつける立場でしたから、この壁の低さが実は大変大きな有利差だったのです。もはや壁がない中で日本がどのような経済運営をするのかというのが、南の国が一斉に工業化へ向かっている動きの中での問題点であります。

他方、国内的にはどんどん増えてきた労働人口が今世紀末からだんだん減りだし、2010年からは全体の人口も減りだすということですし、日本も技術先進国の中では海外から技術を導入することがもう不可能で、自分で技術を考えなければいけない時代になってきました。情報化について、われわれはコンピュータを作るのはうまい、半導体を作るのもうまいと思っていましたから、情報化というのは世界に冠たるものかと思っておりました。

ところが日本の情報化というのは、統計を見ますと、もはやシンガポールにも遅れをとっております。確かに日本はコンピュータを工場の中ではうまく使いました。オフィスの中でもうまく使っておりますが、日本全体の生活の中では、言語の問題もありますが世界からたいへん遅れた状況になっているのであります。

それから高齢化社会の問題であります。日本の高齢化社会というのは世界の中でも大変特色があります。高齢化のスピードが早いということをぜひご理解いただきたい。1990年では65歳以下と65歳以上の人口比率が、5：1だったものが2000年には4：1、2010年には3：1、2020年には2：1となるスピードというのは、世界に冠たるものであります。他の国が高齢化率が10%から20%になるのに50年をかけ

ているのが普通であります、日本はこれを22年で達成してしまう。

高齢化自身は慶賀すべきことだと思いますが、これが経済に及ぼす影響というのは大きな負担をもたらすのではないかと、あるいは高齢化した国はいままです日本が得意としていた貯蓄率が下がってくるのではないのかということが、経済に対してたいへん大きな影響を及ぼしてくると思っております。

2. 日本経済の抱える問題点

そういう内外の大きな環境変化を踏まえて、ではいったい何が日本でも問題なのだろうかという問題抽出が第二点です。私は、今日のこの国境のない時代の最大の問題点は「日本の高コスト構造」だと思います。高コスト構造、或いは内外価格差というのは何かといわれますが、外国に行ってネクタイを買うと安い、香水を買うと断然安いと、ではお土産に買って帰ろうかというのが、実は内外価格差の原点でありました。外国で買って安いものがなぜ日本で高いのか。計算をしますと、それは消費者だけではなく、日本の企業が買うものが外国よりも高いのではないのかということになりました。

日本の国内で買う原材料、資材、国内サービスというのが外国に比べるとたいへん高い。その高いものを使って最後の商品を作るわけですから、その商品が国際競争力を持たなくなってくる。輸出がしにくくなる、輸入が多くなり、輸入に負けだす。こんな国に住んでいると根こそぎやられるのではないのかと思って始まったのが、それでは作る場所を変えようという動きであるわけで、ここに高コスト構造の問題点があるのです。

企業にとって、なぜこの日本に住むことが厳しいか。日本の海外投資は非常に多く、大変伸びており

ますが、日本に入ってくる外国の企業との比率は16：1とか、15：1といわれる。要するに日本の企業にとって住み難い日本という国が、外国の企業から投資されないというのは当然です。これは外国の人がインバランスといいますが、私たちはインバランスは外国の問題ではなくて、日本の産業土壤が、企業土壤が住み難いということが問題であるのです。

どうしてこのようになってしまったのかといえますと、貿易をしている産業は、世界の競争に勝ち抜かなければいけないために一生懸命生産性を上げ、腕を磨いてきたわけです。農業とか、サービス業というのはどうしても競争が国内だけに限られたということがあったと思います。その結果、世界と比較すると非常に低い生産性になってしまった。昔は大企業と中小企業の生産性格差の問題を二重構造といっていました、最近はこの二重構造は別な意味で、高い生産性部門と低い生産性部門が併存しているということになってしまったのです。

高度成長期は、リーディング・インダストリー～ある時は自動車、ある時は家電、ある時は鉄鋼・化学が富を稼ぎ、それを日本全体でうまく分配するという形で、この内外価格差の問題、あるいは高生産性、低生産併存という二つの問題点が顕著に出なかったのです。なぜかといえますと、鉄鋼産業だけが世界に冠たる製品を非常に安い値段で作ったために、日本の他の部門のコストの高さをカバーしても余りあるような状況であったのです。

ところが、大競争時代というのは他の国も競争力を付けてきた。日本のことを考えてみますと、鉄鋼部門だけを比べて見るとまだいいのですが、それを運んだり、延ばしたりしているうちにだんだん競争力がなくなってくる。要するに鉄鋼産業だけ、あるいは自動車産業だけの合理化だけではすまなくなってきたというところに、日本全体をリストラしない

とうまくいかなくなってきたということが、最近の経済構造改革だったと思います。空洞化といっても、まだ日本の海外投資比率が10%ぐらいですから、アメリカの25%と比べると低いといわれております。同じ空洞化、同じ海外投資でも良い空洞化と悪い空洞化があるといわれております。良い空洞化というのは、日本は非常に賃金が高くなった、従って賃金の高い部門、単純労働の部分は海外で作ってもらって日本で輸入するという形で、日本の労働集約的産業が海外に移転するというもので、非常に経済原理に合っているのです。

いま起きている現象はどういうことかという、低生産性部門が残ってしまって、その低生産性部門が高い生産部門を外に追い出し、住み難くしているわけであり、このような低生産性部門がなぜ生まれてきたのかというのは、やはり競争がある程度制限をされて、みんなで仲良く分け前を持ち合うことだったと私は思っております。それは日本の安定的な成長が政治的な安定という意味で、非常に重要な要素であったと思います。けれども、このままいくとじり貧になるのではないかとこの予感を感じ始めているのです。この高コスト構造に更に拍車を掛けるいくつかのことがあります。

一つは「世界一高い法人税」です。現在アメリカは41%、イギリス、フランスは33%、ドイツはまだ48%ですが、アジア諸国は30~33%です。税率の高い国に企業は寄りつかない。これは高コストであるというだけではなくて、できれば税率の低いところという流れがあるわけであり、産業の空洞化が租税の空洞化、税収の空洞化になってしまうのではないのかということが問題であり、これが日本の高コスト構造に輪を掛けている一つではないかということです。

もう一つは、福祉の問題に関係することです。年

金とか、あるいは健康保険の問題であります。いま福祉にかかるお金は国全体で60兆円であり、これを3分の1ずつ負担してございまして、企業が3分の1、労働者が3分の1、国が3分の1というのが大まかな数字です。また最近では年金基金とか、厚生年金とか、あるいは健康保険の老人負担分の問題とかいろいろ企業も悩んでいるようです。

しかし問題は今後この60兆円が20年後、30年後にどのぐらいになるのかということ、5倍になるのだそうです。60兆の5倍というと300兆です。要するにここに同じ商品が並ぶとすると、日本の商品はコストが同じであっても、その上に社会保険料という形で、高齢者を負担する部分、福祉を負担する部分がコストにのってくるわけですから、どちらを選ぶかということ、コストの高い日本のほうが選ばれず、同じ品質であれば安い物に手を出す。日本で生産すると、将来の問題としては社会保険料という非常に取りやすい形で企業から福祉の費用を取っていくということになると、ますます高コスト構造を助長することになりはしないかという問題が出てくるのです。

私は最近福祉と経済は共生をしないと行けない、産業の空洞化が、実は福祉の空洞化にもなるということ、是非お気づきいただきたいと思っております。どういう形で負担するのかということは別にして、必ず何らかの形で負担が増えるわけですから、経済に、市場に中立的であるということ、どうしても間接税ということになります。この負担が増えるのをどういう形で経済と折り返していかのかということが、今後われわれがぶつかる非常に大きな問題ではないかと思っております。

日本の高コストに並ぶ問題点としては、「資本投資の不効率さ」だと思います。公共投資に関連して日本国土の均衡ある発展ということがよくいわれます。私は日本全体が栄えるために非常に重要なこと

だと思えます。ただ、なぜ関西空港の発着料があんなに高いのだろうか、また、世界にはずいぶんフリーウェイというただの道路がいっぱいあるのに、日本は通るたびにお金を払っている。しかも混雑したところは全然投資が行われていない。これは日本全体のコストを上げていることにはならないでしょうか。その道路のコストが、日本の商品を高くしているということにならないのでしょうか。

今後財政再建という中で、どうしても必要なことは、公共投資の重点化、戦略的投資、経済構造改革に役立つ投資、あるいは高コスト構造、みんなのコストを安くする公共投資が行われなければいけないということです。もう少し財政を再建し、経済が今後暗雲が出てきたときに戦略的に使うべきではないかという気がいたしております。

それからもう一つの問題点としては研究開発があります。これまでは外国から物・技術を買ってきて、それを加工するというのが大勢であったと思えます。今後は新しい創造的なものを自分たちが作り出せるような体系にしていかなければいけないと思えます。

＜経済構造改革の内容＞

そのようなことを考えた結果、経済構造改革ということで、橋本総理が通産大臣であった時代に、まず三つのことをやろうと決めました。第1段階は景気を軌道に乗せよう。これはある程度経済成長がないと、なかなか経済構造改革は難しいという意味があるのです。第2段階は構造調整といわれる規制緩和、制度改革をやろうということです。そして第3段階が新しい企業が湧いて出るような環境を作ろう、ということです。

この三つを1年、3年、5年かけて同時発進でやるのではないかとというのが、その当時の経済構造改

革の骨子でした。この経済構造改革をやった場合と、やらない場合の計算をしてみました。やった場合は、2010年までに年率3%位までの成長ができる、失業者も150~160万人ですむ、経常収支もGNPの1%位の黒字が出せるのではないかというシナリオでありました。何もしなかった場合は、成長率は半分の1.2~1.5%位、失業者は恐らく500万人位出て、経常収支は当然赤字になってしまいますということをしていたわけです。

3. 今後の産業構造 (ニーズとシーズのピックアップ)

ではどういう産業が伸びるのかということで、「いまいったい何が欲しいのか」、「経済成長をする必要があるのか」ということも議論いたしました。その中でやっぱり欲しいものというので残るのは、健康、長寿、老後の福祉、環境、情報化とか、住宅とか、物ではなくて文化であるというようなものが出てきました。そういう欲しいもので、今後需要が伸びるのはなにかという分析をしたわけです。その中で選び出したものが住宅関連、生活文化、情報通信、医療福祉、環境、新エネルギー、それから国際化のための国際化ビジネスなどでありました。

消費者の需要も恐らく生産者中心から消費者中心になるし、いままでの大量消費型から、分集、少集、小集といわれるように小さい需要の分散型の累積になるのではないかと。それで、需要の方から考えますとどのような産業構造になるのか。戦後の大量生産時代と違って、自動車産業が日本を引っ張る、リーディング・インダストリーになるという形を富士山型とすれば、今後はいろいろな需要が分散して出てきます。そういう形で出てくる産業というのは、大雪山連峰のような、一つの山ではなくていくつもの

山が山脈のように連なった形、日本経済を引っ張る産業はおそらく複数、たくさんのもが引っ張っていくということになるのではないのかという点の一つであります。

二つ目は、サービスと物づくりがエコーするのではないのかということです。これはどういう意味かというと、サービス産業が伸びると、実はいい機械を必要とするようになるということです。いい機械ができるといいサービスができるようになる。医療などはその典型でして、遠隔地医療といわれていますが、非常に装備率の高いものが出てくると思います。そういう意味でサービスの量が大きくなると、機械が出て物づくりが必要になる。物づくりがいいものを作ると、いいサービスができるという相乗効果の構造になってくるのではないのかと思います。

それから第三の特色は、その土地の文化を生かした土着型、或いは内発型になるのではないのか。もちろん企業誘致ということは今後も行われるのですが、産業発展の形態として、グローバル化、ボーダレス化が進むと恐らくその地区の特色は何かということが再び問われて、その土着のメリット・デメリットは何かということを追求することが必要になってくるのではないのかということが、この需要の分析から出てくるのです。

供給サイドからの分析というのは、この日本の良さというのは何だろうか。特に大量生産、大量消費時代が良かったということがあったと思います。それから非常に優秀な中小企業がたくさんあるということ、効率・省エネ・省資源の技術が非常にうまい、あるいは環境の技術が非常にレベルが高いということがあったと思います。

最近通産省が元気のいい中小企業の共通項ということで調査をさせていただきました。非常に元気のいい中小企業は、一つの生産ロットが小さくなって

おり、かつ精度なり自分のところの得意な技術が非常に高いものになっております。そういう意味で、非常に専門性の高い中小企業が出てきているのですが、この専門性の高さが合わせてネットワークを必要とする、集積を必要とするという、横と手を繋がないと全体として一つの商品が出てこないということがいわれるようになりました。地域で集まると集積ということですし、コンピュータなりネットワークでつながると、ネットワークでの集積ということになってくるのではないかと考えております。

4. 北海道の産業戦略について

最後に北海道のこれからの産業戦略を考えられるときに、4点ほど、私の感想を申し上げておきたいと思います。

私は北海道の産業構造をいろいろ調べさせていただきましたが、第一の点は、基本的には、是非「危機感を持っていただきたい」ということ。いまわれわれが遭遇している問題は、先ほど肝臓の病気といいましたが、すぐに痛みが出ないところが問題であります。ただその兆候はすでにあるわけです。景気の回復が何となく緩慢である、企業立地が非常に激変しているということ、皆さんは肌身で感じられていると思います。

更に財政再建が叫ばれる中で、北海道の産業構造を考えていった場合には、公共投資の依存度が非常に高いわけですが、財政再建ということで恐らく支出が今後非常に低く抑えられてくるということだと思います。更に、公共投資が重点化されるということ、日本の戦略にとって必要なところに限定すべきではないのかという議論がだんだん出てくるとしますと、恐らく量的にも、質的にも私は公共投資依存型のところが、これから今までのように意図的に公共

投資を増やして景気を浮揚しようというときは180度違った動きにならないだろうか、ということです。

それから北海道は非常に集積度が低いということがあると思います。それと最近通産局が調べているようですが、「北海道価格」というのがあって、ただでさえ日本全体が高コスト構造の中であって、この高コスト構造を更に上回るようなことになっているのではないのかという気がしております。この危機感が大変豊かな生活のために気が付かないというところが、私は一番の危機感だと思っております。

第二に申し上げたいのは、「自画像を明確に描いていただきたい」ということであります。これは産業戦略の時には需要面、北海道の皆様が何を欲しがっているのか、そして日本市場が何を欲しがっているのかということ进行分析していくことと、供給の実力をもう1回見直していただくということではないかと思えます。北海道の需要とか供給ということに決して悲観的なことを申し上げたいわけではありません。むしろ冷静な目で見た上で、良い点悪い点を出した上で、その上に新しいイメージを作り出していくということではないかと思えます。

第三に申し上げたいのは、良い提言、良い構想はたくさんあります。しかし申し上げたいのは、「提言の時代から実行の時代に入るべきではないのか」ということです。事実、いろいろな関係者の皆様がどんどんいま行動に移っていることを伺っております。従いまして、今後は構想を更に詳細化し、実行に入っていくことが重要ではないのかと思っております。

それから第四に申し上げたいことは、いま中央では行政改革、規制緩和、制度改革等大変花盛りであります。この制度改革につきまして、是非「地方の声を上げていただきたい」ということです。公共投資を増やしてくださいというだけではなくて、自分に不便な制度、それから自分に有利な体系、この間

H・I・Sという航空会社の話（注：東京－札幌間の航空運賃を現行の半額で運行する等をうたった新会社の設立記事）を新聞で読みましたが、あのようなものを作って、このコスト距離の高い遠い北海道の欠点を打ち破っていくというのは大変重要なことではないかと思えます。

今後は確かに激動の時代ではあります。少しずつ危機感が高まる中で、私は、今後10年間というのは日本は貯蓄率がまだ高く、余裕のある時代だと思います。この10年間みんなで知恵を合わせて、日本中の英知を集めてやっていただくことの中で、恐らくチャンスは生まれてくるし、可能性が必ずや生まれてくるのではないかと硬く信じているものであります。私のお話が少しでも北海道のために役に立てばと思ってお話を申し上げた次第であります。

（文責：編集部）

プロフィール

堤 富男（つつみ・とみお）

通商産業省顧問、前通商産業事務次官

昭和13年生まれ。群馬県出身。昭和37年東京大学法学部卒業後、通商産業省入省。資源エネルギー庁公益事業部長、通商政策局次長、貿易局長、立地公害局長、資源エネルギー庁長官、産業政策局長などを経て平成6年事務次官に就任。平成8年現職。

<仙台会場>

開催日：平成8年11月29日（金）

開催場所：仙台国際センター「橘」

テーマ：2050年の東北～子孫たちに何を残せるか？～

東北のみらい

東京大学名誉教授 木村 尚三郎

<先が見通せない時代>

私なりに21世紀を考えますと、人間が見通せる時間という普通30年といえます。ですから、2025年位までで考えますと、今までの経済成長の観点からすると、日本全体の経済はあまり伸びそうもないわけで、通産省などは2025年までは今のままでいくと0.8%位の成長しかないだろうと考えております。従いまして、この際消費税を上げ、それから介護と医療を分離して、医療費を1割削減し、健康保険についての自己負担を増やし、その上で行革を進めたとしても2%台位にしかないのではないかと思います。今から30年位先迄は、シビアな見方をしているのです。これは経済企画庁もそうですし、話題の厚生省もそうです。ですから経済成長率という点では、大きな期待ができないというのが通説です。

なぜかといえば、本当に売れる工業製品とか、産



業技術が無くなったからです。今でもマルチメディア、インターネット、衛星通信、デジタル放送などという話はマスコミを賑わせているのですが、逆にいうと、そのような話しかできないということです。いずれも、頭しか喜びませんから元気が出ないわけです。元気というのは全身から出るものです。

昭和30年代、40年代は全身を喜ばせる技術がたくさんありました。例えば抗生物質がそうでありましたし、マイカー、新幹線、ジェット機などはみんなそうです。あるいは電気洗濯機、冷蔵庫、掃除機のような家庭電化製品であるとか、ナイロン製品であるとか、全身が喜ぶ、元気の出る技術が次々と出てきて、そして昨日より今日、今日よりも明日がいいということを我々は信じていることができたわけです。

でも、そのようにひたすら走っていて、その先が見えなくなってしまったのが昭和50年代に入ってからのことです。未来がどちらにあるのか、よくわからなくなってきまして、宇宙時代というけれども本当に宇宙時代に自分たちの未来を賭けたらいいのか、それとも農業の見直しの方に、これから生きがいとか、幸せ、喜び、充実感があるのか、そこが今わからなくなりました。誰も教えてくれないわけです。

農水省は今年から「就農準備校」を始めました。農業に就くための準備の学校を全国8カ所に作ったわけですが、これが大変な人気です。特に都会の若い人たちが主です。なぜこの就農準備校に来て農業をやりたいのか、とその人たちに聞きますと、40%の人は脱サラ組で、今の企業や職種がそのまま21世

紀まで持つのかどうか分からないし、仮に21世紀まで持ったとしても、自分が本当にそこで成功できるのかどうかも分からないから、脇の下に冷や汗をかいて生きているよりは額に汗して生きていきたい。つまり脱サラということが40%あるわけです。次に、米、野菜、花も全部自分で作りたいというのが40%いるわけです。今いかに、特に若い人を中心に将来に生きる不安が広がっているのかということがよくわかります。

従って、本当のわれわれの生きがい、幸せ、喜び、充実感がどこにあるのか、そこが今わからなくなりました。全世界的に大きな思想、理念、ビジョン、イデオロギーというものがなくなった時代です。どちらに向かって明日を生きたいのか、よくわからない時代です。国もわからないし、企業もわからないし、もちろん個人もわからないのです。

このようなときは、どちらの方向に未来があるのか、はっきりと先がよく見えないので人は必ず動きだします。じっとしてはられないので、必ず動きます。例えばよくありませんが、身内が生きるか死ぬかわからないときには、病室の前でうろうろするものでして、うろうろしたら治るというものではありませんが、でもうろうろするわけです。世界的にそのうろうろが始まりました。

<21世紀は徒歩の時代>

今のように先が見えないときは、ほかにどのようにしているのか、ほかに対する関心が非常に高くなるのです。つまり空間感覚がものすごく発達するのがこれからの時代です。

19世紀半ば以降、あるいは明治以降は、僕らは時間の観念に生きてきたわけで、明日を考えていましたから、明日のために生きてきた、まさに国家百年

の計などを立てたわけです。明日のために生きるという時間の観念が多かれ少なかれいま後退せざるを得ないのです。よく見えないわけです。その分空間感覚が働くのです。

明治より前には散歩はなかったといわれております。「散歩」というのは道草の塊でありまして、意味があるのかなのか自分でもよくわからないが歩きながら何となく考えています。歩くときは頭がよくめぐっているわけです。

だから、全世界が歩く時代がやってまいりました。ですから21世紀は徒歩の時代です。20世紀は自動車で目的地に向かって逸早く行って帰ってくるという時代でありまして、まさに科学や技術がどんどん進歩・発展し、それが自動車に象徴されていった時代でありました。21世紀は全世界を見たいわけですから、勿論自動車にも、新幹線にも、ジェット機にも乗るのですが、最後は降りてその土地を自分の足で歩きたい。そのようにしないとその土地の良さがわかってこない、暮らしと命の知恵が伝わらないからです。

工業製品ならば買ってあげればいいのですが、どのような生き方をしているのかなというのは、その土地に実際に行かなければならないわけです。まさに人が歩いて魅力のあるところに人が集まります。人の集まるところにこれから新しい繁栄があります。

その意味では、町であれ、地域であれ、どちらでも構いませんが、人がそこを歩けるのかどうかが大問題です。安心して歩ける良い道があるのかどうか、それにまた良い景観があるのかどうかです。

ヨーロッパでも14~15世紀から17~18世紀かけまして、やはりそのような時代がありました。農業技術が成熟して、そして産業技術は、19世紀の半ばまで起きないという時代です。その時代に人は猛然と歩き、かつ移動いたしました。アルベルティーというイタリアの天才的な建築家が出てくるのが15世紀

のことです。彼はこのようなことを言っています。「道路は曲がりくねっているほうがいい。曲がりくねっていると、歩くたびに新しい景観が開け、思いもかけない景観が開けて、そして都市の偉大さを増すから」と言っているのです。

これまでは私どもは、19世紀の半ばから20世紀の60年代、70年代の前半ぐらいまで、次々と新しい技術、新しい工業製品を生み出しまして、そしてそれを全世界に売ってきました。ですからそれはまさにわれわれみんなが物が好きであった時代です。これを、私は「物好き」と言っているのです。物好きの時代は残念ながら終わりました。もちろん今でもバイオ、エレクトロニクス、新素材、宇宙産業とかたくさん技術の芽が出ていることは事実ですが、その技術の芽と技術の芽がお互いに結びあって、相乗効果を出して、次の技術革新、高度成長、生活革命を、いつ、どのような形で花開かせてくれるのか、ここがよくわからないのです。

先ほど申しましたように、私たちが見通せる2025年までに実現させるのは無理であろうということです。もちろん全身の喜ぶ技術が出てくれば別です。例えばガンが治りますとか、あるいは家庭用ロボットが開発されるとか、あるいは4階建ての2,000人乗りのスーパージャンボが出てきますとか、何かそのような全身が喜ぶ技術の見込みがあるのなら別ですが、……。

ですから全身で喜ぶ技術の展開が、あるいは工業製品の展開が、残念ながら2025年までは期待できないという状況です。そういう中にありまして、今申しましたように、何よりも空間感覚が拡大するのです。全身を楽しませるために自分で歩くのです。自分の手足を使って多分に演劇をやる、スポーツをやる、何でも結構ですが、自分なりに手足や頭を使いたいという時代がこれから始まりつつあるというこ

とす。これは前近代の生き方と大変によく似ているのです。前近代の例えば農家の人は全部自分で作ったわけです。全部といっても、それは限度があったとしても、とにかくありとあらゆるものを自分で作り出さないとやっていけないわけでした、あのようになり、手、足、頭を自分なりに使うということが、これが生きがいになってきつつあります。ですから技術では喜ばせてもらえないということです。その中で、まず人が動き出したということで、若いも若きも動き出したのです。

＜旅行産業の時代＞

従って、21世紀最大の産業はいうまでもなく「旅行産業」であるということになります。

世界の総所得の1割はこの旅行産業に流れる。また、総労働人口の1割もその旅行産業に流れる。旅行産業と申しましたが、それはいわゆるレジャー産業とは違います。今までは、要するに働け働けで儲かったのですから、従って本当は1年365日全部働きたいのです。でもそのようにやっていると身も心もくたびれますから、時々会社はリクリエーション～再び体と心を作り直す～をやらなければいけなかった。そのためには普段やらないことをやったほうがいい、非日常的なことをやったほうがいいのです。非日常的なこととは何かというと、要するにまず社員を温泉に連れてゆくのです。お湯が一杯あるお風呂に入るとお湯がザザッと溢れ出る、溢れ出るといっても料金は同じですから嬉しくてしょうがないのです。

またそのようなときは山海の珍味がウワッと出ますから嬉しくてしょうがないのです。それに普段謹言実直な顔をしている上役が、急に鉢巻きをしてタコ踊りなどをやったりすると平社員が、喜ぶわけです。普段やらないことを一晩だけやって、気を取り

直して翌日から働くというのが昭和30年代、40年代までのリクリエーション、宴会というものでした。旅はまさに非日常性の追求ですが、そういう旅の時代は終わりました。

この東北地方には温泉がたくさんあります。温泉にも入りたい、でも旅館丸抱えで、その中にじっとしているのではなくて、その土地を自分なりに足で散策をしたい。史跡や美術館もあるかもしれない。そういうところを散策したい。ガラス工房があれば、自分もそういうところに参加したい。

自分なりに手、足、頭を使いたいわけです。ですから、もしおいしい食堂とか、レストランがあれば、宿屋ではなくて、そういうところで食べてみたいと思うのが当然です。東北地方などは、お蕎麦屋があちらこちらにあります。何となく暗いくたびれたお店が多いようです。そこで、例えばお蕎麦によく冷えた白ワインを添えると絶対に女性が来ます。白ワインとお蕎麦というのはこれがよく合うのです。ですから、外国の人に来てもらうように売り込むわけです。全体的にあまり景気が良くない時代ですから、今一番景気のいい東南アジアからどんどん来てもらわなくてはいけないのです。

<よそ者との交流の時代>

東南アジアの人は食事のメニューで「キツネうどん」といってもわからないわけですから、食事のメニューの見本を見せれば一目瞭然です。あれは世界に冠たるものでして、1993年にオーストラリアのブリスベンというところで「国際レジャー博」というのがあったときに、一番人気があったのは日本館の食堂の入口に置いてあった見本ですが、海老の天ぷら、カツ丼が、蠟だか、プラスチックなどで作っているわけでありまして、本物よりもよくできている

というので、本物はいらぬから見本だけくれ、といわれて困ったという話がありました。

ともかくも外国の人が、あるいはよそ者がその土地の良さを見い出してくれるのです。地元の人にはわからないのです。例えば日本人だったらどんな汚い蕎麦屋でも見本だけは立派ですから、当たり前と思っていますが、よそ者が見ると、そこに日本人の長所も、あるいは逆にいうと短所も発見する。よそ者との交流がないところにはこれからの大きな発展はありません。

東北の未来を考えると、私は、まさにこのようにしてよそ者、あるいは外国の人に積極的にどんどん長所、短所を言っていただく、また逆にいうと、そのようなよそ者がたくさん来るような魅力をどのように高めるかということが大事だと思うのです。

ですから、今引合いにだしている蕎麦屋を例に取れば、その見本に1番、2番、3番と番号さえ付ければ全世界の人がその番号を見て1番と注文ができるわけです。これは、「わかりやすさ」ということなのです。全世界の人にとって、東北をわかりやすくすることが、これから不可欠なことです。宮沢賢治も言っていますが、やはり東北の人間にしかわからないというのではダメでして、全世界の人にわかりやすくすることがこれからの発展の大きな要素です。

よそから聞かれるとわからないことがいくつもあります。外国の人は紫式部というのはよく知っています。だから日本に来て、紫式部の墓はどこですか、と聞かれると先ずみんなは絶句するわけです。よそ者に聞かれて初めて自分がいかに知らないかということを知るわけです。ですから盛んに交流できるところというのは、自分の長所・短所をよそ者に教えてもらえるのです。そのようなところに新しい発見があります。

江戸の18世紀、19世紀の日本海がそうでありまして、北前船を通して京の文化が入ってくるわけです。従って今でも秋田には、美人もいますし、おいしいお菓子も、「しょつつる」とか、「きりたんぼ」とかいろいろな料理もある、というのは、よそとの交流の結果です。その土地の人間だけが勝手にうまいと思いつむのではなくて、よそ者との交流の中で、誰にでもうまいものが出てくるのです。

パリもそうでした、いろいろな地方の料理がみんなパリにあるわけですが、地元と違うのは、やはりアフリカ人も、ロシア人も、アメリカ人、日本人もパリにやって来るわけで、いろいろな人の舌によって磨かれて、いい味に仕上がっていくわけです。みんなこれは交流の結果で、決して最初からそのようなものがあつたわけではないのです。

ですからまさに18世紀、19世紀にはたくさんの方が交流し合つて宿場町が発達いたしました。日本の中に270の国があつたのですから、言葉がそれぞれ違うのです。そのわけのわからない人たちと毎日接していたのが宿場町の人たちです。そのような人と人が寄り合う場が発展するわけです。

先ほども申し上げましたが東北地方にはたくさん温泉つまり湯治場がありますが、湯治場というのは何も健康になるためにだけに来たのではないのです。そこでお互いに風邪の治し方とか、あるいは菜っぱの漬け方とか、いろいろ情報が交換されるわけです。野沢温泉に集まってきた江戸時代の湯治客の地域分布図と野沢菜という菜っぱが栽培されている地域が一致しているということが知られております。

ですから知恵が交換されたのです。単に身体がよくなったわけではないのです。頭と身体両方がよくなった。暮らしと命の知恵が交換されたということです。その暮らしと地域の知恵を今全世界が求めているのです。

<過去には発展のヒントがある>

昔様々あつた、戦後忘れてしまつていた暮らしと命の知恵、あるいは勇気とか、愛情などをいま掘り起こしするときです。過去を大事にしないところはこれから発展がないです。

東北地方というのはまさに豊かな過去が溢れているところです。白神山地が世界遺産に登録されていますが、いつから世界遺産条約ができたのかといいますと1972年のことです。第17回パリのユネスコ総会が世界遺産条約というのを満場一致採択をした。ついこの間までは、昔のものというのは古いもの、悪いもの、捨てるべきものと思つていたのですが、今のように進歩・発展が止つてしまひ技術文明が成熟している世の中にありましては、昔の様々な宝物を今掘り起こさないといけない。文化遺産もあるし、美しい自然遺産もあるのですが、そういうものはその土地だけの人の宝ではなくて、全人類にとっての宝であるということで登録されています。

昔というのは今は古い時代ではなくて、昔が限りなく貴重になってきたのが現代です。漢方薬とか、針・灸の類はついこの間までは、お医者様はあのようなものは理屈ではわからないからと、遠ざけていたのが、今積極的に取り入れられるようになりました。NHKの大河ドラマにしてもここ数年は、「秀吉」や「吉宗」など古い話ばかりやっています。ついこの間までは学校の先生は、テレビ、新幹線、ジェット機、マイコン、コンピュータ、ペニシリンも何もないから昔の人はかわいそうだった。今はいい世の中に生きていと教えてきたのです。確かに昔はそういう意味では大変だったけれども、その代わり輝いていた、人間の生きる知恵とか、勇気、愛情とかがあるのですが、これをいま掘り起こしているわけです。現代にとって大事だからです。

＜物好きから人好きの時代へ＞

従って、広い意味での宗教の時代がいま来つつあります。お互いに人と人が好きになりあう、湯治場でもそうです。知らない人同士が好きになりあったわけです。あるいは家の中に仏壇とか、仏間があって過去の人と先祖とそしてその時に生きていた人たちのお互いが好きになりあうのです。

例えば、仏壇のロウソクに火を付けると何が起こるのかというと、あのいい光に誘われて死んだ人の魂が帰ってくるわけです。これは証明できないけれど、函館の古い倉庫に古いランプを付けると、若い人々が寄ってきて、ビールを飲んだり食事をしたりしているわけです。もちろん若い連中だって、年がら年中ランプの生活をしたいとは思っていないでしょうが、あのランプの光には蛍光灯の光にはない人情味、温かみがあるのです。これを若い人ほど、切実に求めているということです。今、石井幹子さんという方が国際的な照明デザイナーとして活躍しておられますが、あの人の心の中にあるのは、まさにお灯明の火です。これとハイテク技術と結び合わせているわけです。東京タワーも彼女がライトアップしたものです。まさにお灯明のオレンジ色の光とロウソクの白い色のところを重ね合わせたわけです。

東北というと全体に暗いイメージがあります。暗いイメージがあればあるだけ、いい光で満たすということは、極めて大事なことです。米と同じ位、あるいはそれ以上に大事です。このようないい光をいま切実に求める時代になってまいりました。

東北はいま暗いといいましたが、暗い寒いというイメージは東京を中心に考えるからそういうことになります。ただパリをご覧くださいと、パリは北緯49度ですから、これを横に伸ばしていきますと、

旧樺太の日本領の北限は北緯50度ですから、これと同じでして、パリのほうがもっとも暗くて寒いのです。冬の午前8時という、真夜中みたいに真っ暗であります。暗くて寒いところですが、冬になると、レストランとか、カフェの照明が温かく明るく輝くのです。そこに私たちよそ者は、このパリの情熱とか、明るさとかを見て取るわけです。あれは大事なのでありまして、もし東北に暗いイメージや寒いイメージがあるのであれば、温かい東北、明るい東北というのをこれから積極的に作り出していく必要があります。

もう一声申し上げますと、「東北」という言葉をやめた方が良いのではないかと。今日はほくとう総研の方に「東北」をやめた方がいいのではないかと。何となく具合が悪いのですが、あの言葉は、僕らが戦後に積極的に使うようになったのです。勿論それは戦前からありましたが、戦前にはこの辺を「奥羽地方」といったのです。「奥羽地方」の方がはるかにこれからの時代にふさわしい名称です。

イギリスも、スカンジナビアの国々もいずれも寒くて暗いのです。北欧と確かに地理では言うのですが、イギリスはイギリスという形で、スカンジナビアはスカンジナビアで、デンマーク、ノルウェー、スウェーデンという形で頑張っているのです。北とか、東というのは総体的な概念でありまして、東京を中心に考えますので、東京自身がまさに技術文明の中心という魅力をいま失っているわけで、何も東京を意識しながら東北、東北という必要は全くないのです。北海道は北海道の魅力がある、北海道の魅力というのは、大きすぎるのでありまして、14支庁あるのですから支庁ごとの魅力をこれから大いに高める必要があります。北海道といえば、サケとか、熊の木彫りとか、バターなどのイメージしかなくて、今のところは一つの県と同じぐらいのイメージしか

ないのです。もっと地域の個性というのを出さないと、これからはやっていけないと思うのです。

視点を変えまして、今度は女性に目を向けますと、女性にとって明日に期待もあるが同時に不安もあります。これから亭主が出世することはあまり期待していないのでありまして、それよりも今日一日の暮らして命を最高に輝かせたいというのが女性の生き方であります。全世界的に男の生き方から女の生き方へ、明日に生きる生き方から今日に生きる生き方へいま変わっているわけでありまして。と同時に時間に生きる生き方から空間に生きる生き方へ、これは空間に生きるのは女性であるのはよくわかるのですが、旅が好きなのは女性です。

女の人というのは、この道一筋とは違ひまして、コミュニケーション感覚はものすごく発達しているわけです。男は定年になりますと、パタッと年賀状もお歳暮も来ない、がくっと来るわけです。ところが奥様はチャンと年賀状も来ます。奥様はどの様にしてコミュニケーション感覚を養っているのかというと、長電話であります。時間とエネルギーとお金がちょっと無駄みたいですが、でも人間関係を養っているのです。昔はもしお嫁入りをしたければ、爺様に相談してもダメだ、婆様に相談せよといわれてきたこともあります。まさに女性のコミュニケーション感覚、嫌な相手とも付き合う感覚、女の人にはそれがあります。この付き合う感覚が、実はこれから大事になってきているということです。よそ者も宿場町の宿屋みたいにニコニコ受け入れて、お互いに好きになり合うのです。物好きの時代から人好きの時代がいま始まりつつあるのです。

<五官でとらえる時代>

人好きの時代というのは、この過去の人も好きに

なることもいうのです。先ほどこちょっと言いかけたことですが、仏壇のロウソクの炎や位牌などは死んだ昔の人との語り合いを意味するのです。ヨーロッパですと、人が死ぬと枕元にたくさんロウソクを立てます。その火に誘われて天使がやってきてその魂を天国に導くといわれているわけです。今、全世界的に老いも若きもあのオレンジ色に抵抗できる人はいません。あのロウソクのいい光は抵抗できない光でありまして、皆ちょっと気が滅入っているからです。

声は人と人を結び合わせます。昔はたくさん声を出す機会がありました。例えば「よいとまけ」の労働歌とか、田植え歌で声を合わせますと心が通い合うのです。しかし、戦後機械化が進んでコインを入れると物が出てくるものですから黙ってしまったのです。すみませんとも、何もいう必要もないのです。高度成長期の下で声を出すことを忘れたわけです。でもいまのように先が見えないときは、また声を出し合いたい。

高度成長期は目だけを見ていればいいのです。目で数字だの、横文字だの、図形を見ていれば未来が開けていった。人間の得る情報の86%は目からといわれております。目を使っていれば、それで未来がどんどん開けていった時代でした。

ところが目を使ってもいま見えないのです。テレビも昨日までのことは、あるいは今朝までのことは懇切丁寧に報道してくれますが、半日後のことはまったく教えてくれないのです。ですからいま全世界がそのようになったのです。いくら目で見えてもわからないのです。

目の力がいま衰えたのです。もうちょっといえば技術文明が成熟してしまったから、目だけではわからなくて、鼻も利かせ、耳も利かせ、口も利かせ、手足も効かせるという時代です。86%の情報は目でしょうが、目からだけでは本当のことはわからない

のです。

戦争の場面をテレビや映画などで平気で見ていられるのは、玉が飛んでくる恐怖感がありませんし、硝煙の匂いもなし、それから土埃の不快感もないし、あるいはビルなどが燃えて熱風がくるということもないので、われわれは安心して見ていられるわけです。

目は一番誤りやすい器官ですから、従って仏像をご覧になればわかりますように目は開いていない、半眼に開いているということになっていますが、仏様は決して何も見ておられないのです。寝ているのかというと寝ているわけではないのです。耳を大きく開いていますし、鼻筋も通っておられて、手も動かしておられて、目の以外の器官をフル導引して、事物の本質を見極めようとされておられるのです。これを「心眼を開く」と申します。心というのは目以外の耳、口、鼻、手足をフルに動かす。目についても数字とか、横文字を見る理性的な目ではなくて、色とか、光について、ああ、美しいなと思う感性的な眼を働かせるのです。こういうときに始まっているのです。

東北は美しい、自然はもちろん美しいわけですが、東北は美しいということは何も自然だけではなくて、例えば口にも美しい、それはおいしいということです。耳に美しい、耳に美しいということはいい音がしているということです。ですから部分的にせよ、例えば、いまでも鐘の音などのいい音がしているはずですが、僕らは聞こえないのです。実際にパリの西北のラ・レファンسという未来型の都市は車を地下に走らせております。

ですからいい音が遠くから聞こえてくるというのは大変大事なことです。そのようないい光とか、いい音とか、良い香りがあり、そしていま申しました目鼻口手足についての美しい感性空間があれば必ず人はやってくるはずです。そのためのまちづくりです。五官に美しい、目、耳、鼻、口、手足にとって

美しい空間というものができれば、これはまさに仏間と同じなのです。これがいま大事です。最もこれに適しているのが東北ではないのでしょうか。

資源はたくさんあるのです。温泉もたくさんありますし、それからうまい米もありますし、それは鉄瓶、その他の技術もありますし、そのようなものをいかにこれから現代と結び合わせていくのかです。

よその人との交流の中で、そのような新しい時代での美しさを、産業の点でも人の点でも作り出して、お互いに人好きになって、よそ者も歓迎して伝統的な技術を今の産業と結び合わせていけば、東北というのは、関東などに比べて限りない未来があるはずで、関東は何にもない、人があっただけのところでは、東北は土地ごとに個性があるわけです。少ないようだが、まさに14%を最高に輝かせる時が、新しい未来が大きく開けるときではないかと思うわけです。

(文責：編集部)

プロフィール

木村 尚三郎 (きむら・しょうさぶろう)

東京大学名誉教授、運輸省・運輸政策審議会特別委員、国土庁・国際化による地方進行政策研究会座長

昭和5年生まれ。東京都出身。昭和28年東京大学文学部卒業。昭和41年同大学教養部助教授、同教授を経て、平成2年退官、同年同大学名誉教授に就任。

著書：「近代の神話」、「組織の時代」、「西欧文明の原像」、「中世の街角で」、「家族の時代」など多数

'96地域シンポジウム 各会場の光景

<札幌会場>



パネルディスカッション

パネラー： 矢田 俊文氏 (九州大学経済学部教授)
 正木 宏生氏 (株ダイナックス代表取締役社長)
 濱田 康行氏 (北海道大学経済学部教授)
 司 会： 高田 喜義 (ほくとう総研専務理事)



<仙台会場>



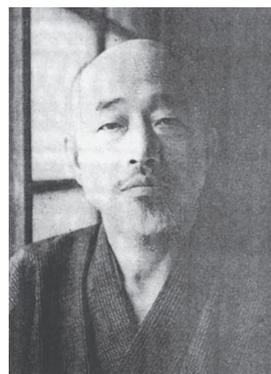
パネルディスカッション

パネラー： 水戸部知己氏 (社東北経済連合会副会長)
 相沢雄一郎氏 (株河北新報社専務取締役)
 杉山 陸子氏 (企画集団ぶりずむ株代表取締役)
 多田 克彦氏 (南六角牛農場代表取締役)
 高田 喜義 (ほくとう総研専務理事)
 司 会： 松藤 哲夫 (北海道東北開発公庫理事)



「石原莞爾」

確たる「思想」を持った陸軍軍人



(財)ほくとう総研 理事長 窪田 弘

旧日本軍の幹部軍人には、東北地方出身者も多かった。家が貧しくても、意欲と能力があれば、教育が官費で受けられ、昇進が可能であったからである。戦後は、旧軍人の評価は高くないが、それでも海軍には、米内光政、山本五十六など、何人かはいる。しかし、陸軍将帥には「なぜこれほど無能な人が陸軍の最高位になったのかまったく説明がつかない(猪木正道「軍国日本の興亡」)」と言われるような人物が多かった。陸軍では、一天(陸大卒を示す天保銭に似た徽章を意味する)、二表(図表などを器用につくる能力)、三敬礼(厳正な敬礼で上官を喜ばせる)、四馬鹿(上官の感情や誇りを傷つけず愚直に徹する)が、昇進の要訣であると言われた。その中で、石原莞爾は、殆どただ一人「思想」をもった陸軍軍人として、今日なお多くの追慕者をもっている。

石原莞爾は、山形県鶴岡の人。満州事変を起こした張本人として有名である。関東軍参謀の後、参謀本部作戦課長、同作戦部長となったが、支那事変(日中戦争)の不拡大を主張して解任され、関東軍参謀副長に左遷された。彼が軍の中樞で脚光を浴びたのは、正味6年間に過ぎない。石原が満州事変を企画し、その後の軍部の独走の道を開いた責任は大きいものの、反面、「王道主義」「民族協和」という大アジア主義を唱えるとともに、東条英機と対立して対米戦八ヶ月前に予備役に編入されたという悲劇性が、後世の同情、判官贔屓をさそっている。

彼の当初の構想は、満蒙の占領・領有論であった。

それは、「支那人ガ果タシテ近代国家ヲ造リ得ルヤ頗ル疑問ニシテ寧ロ我國ノ治安維持ノモトニ漢民族ノ自然的発展ヲ期スルヲ彼等ノ為幸福ナルヲ確信」したからであるという。石原の狙いは、「満蒙問題私見(昭和6)」にあるように、北満地方は「戦略上特ニ重要ナル価値ヲ有シ我國ニシテ安全ニ其勢力下ニ置クニ於テハ北方ニ対スル負担ヨリ免カレ其国策ノ命スル所ニ依リ或ハ支那本部ニ或ハ南洋ニ向カヒ勇敢ニ其発展ヲ企図スルヲ得ヘシ。満蒙ノ資源ハ我ヲシテ東洋ノ選手タラシムルニ足ラサルモ刻下ノ急ヲ救ヒ大飛躍ノ素地ヲ造ルニ十分ナリ」という点にあった。しかし、軍事力によって領土を拡大しようという構想には、さすがに軍中央も反対し、傀儡国家として独立させることになった。

石原は、満州国を立派に建設すれば、中国人も我が徳になびき、華北問題は自然に解決すると考えていたようだが、もともとの発想が、軍事力を背景に満蒙を日本のために利用しようとするものであったから、王道楽土といっても美辞麗句だけで、現実には全くその逆であった。当時満州国に行っていた日本人のレベルの低さも、中国人の人々の反感を高めた。「思いがけもなくいいポストに就いて露骨な成り上がり根性の功名争いが各地に起こり、“満州国”側をあきれさせる。ずるさ、あくどさにおいて日本人は彼等の足下にも及ばないのに、彼等はふっくらとして底深く、こっちは目をギラギラさせて歯をむき出している。伝統と民度の厚薄肥瘦は、どうしようもない。」(青江舜二郎、「石原莞爾」)

石原は、満州国の現実が、自分の理想とあまりに隔たっているのを腹を立て、直言して入れられず、軍の中樞を追われた。「満州国の建設・運営が石原の理想に反して行われたことを惜しむ人々はおおまいである。しかし、彼がかりに志を得て、その任に当たったとしても、彼の目的が満州を基地として利用することにあつた限り、すなわち日本の軍事的支配を前提にする限り、真の意味における王道主義も民族協和もあり得ず、それは歪曲されたものとしてしか実現されなかつたであらう。(大杉一雄、「日中十五年戦争史」、中公新書刊)」



石原の著作として最も高名なものは、「最終戦争論(昭和15年)」「戦争史大観(昭和4年講話、昭和15年最終訂正)」である。その非凡な着想と深い洞察は、今でもわれわれを感心させる。

「戦争は武力をも利用して国家の国策を遂行する行為である。武力の価値が、それ以外の戦争の手段に対してどれだけの位置を占めるかということによって、二つの傾向が起きてくる。武力の価値が高いほど戦争は男性的で力強く、決戦戦争になる。武力が政治的手段に対して比較的価値が低くなると、戦争は細く長く、持久戦争になる。軍事上から見た世界歴史は、決戦戦争と持久戦争の時代を交互に現出してきた。」「我々は、第一次欧州戦争以後、持久戦争の時代に呼吸している。やがて、次の決戦戦争の時代に移ることは疑いない。その戦争のやり方は空中戦を中心としたものであろう。次の決戦戦争は戦争発達の極限になり、次の戦争で戦争が無くなる—世界が統一されて戦争が無くなるのである。飛行機は無着陸で世界を回れるようになり、太平洋を挟んで空軍による決戦が行われる。破壊兵器は、例えば、今日戦争になって次の朝、夜が明けてみると敵国の首府や主要都市は徹底的に破壊されるくらいの、私どもに想像もされないような破壊力のものであらう。敵を撃つものは少数の優れた軍隊であるが、老若男女すべての国民、工業都市や政治の中心が徹底した殲滅戦の対象になる。この惨状に耐えうる者が

最後の勝者である。」

「人類の歴史を見ると、アジア西部に起こった人類の文明が東西両方に分かれて進み、数千年後に太平洋を境にして今、顔を合わせた。この二つが最後の決勝戦をやる運命にある。ソ連は、瀬戸物のように堅いけれど落とすと割れそうだ。内部から崩壊してしまうのでは無かるか。欧州は偉い民族の集まりだが、喧嘩の本元であり、お互いの喧嘩で共倒れになるのではないか。そうなってくると、ぐうたらのような東亜のわれわれの組と、成金のようでキザだけれども若々しい米州、この二つが決勝に残るのではないか。」

「昭和維新は日本だけの問題ではない。東亜の諸民族の力を総合的に発揮して、西洋文明の代表者と決勝戦を交える準備を完了することである。そのために二つのことが大事である。一つは、東洋民族の新しい道徳の創造である。中核は、民族協和の実現にある。明治維新後、われわれは他民族を軽視する傾向を強めた。台湾、朝鮮、満州、支那に於いて遺憾ながら他民族の心をつかみ得なかつた最大原因は、ここにあることを深く反省するのが昭和維新の基礎条件である。第二は、相手に劣らぬ物質力を作り上げなければならぬ。何とかして西洋人の及ばぬ大きな産業能力を発揮しなければならない。」(以上石原莞爾「最終戦争論」中公文庫)

そして、石原は、その信仰する日蓮の教えに従い、当時(昭和15年)から30年内外で最終戦争の時期に入るだろう、その戦争は20年くらい続くだろうと予想する。従って、まだ準備のまったく整っておらず、敗北確実な昭和16年の段階で日米戦争にはいることに反対し、東条と対立したのである。昭和17年7月、アメリカがガダルカナルで反撃に出た当時、高松宮が石原を呼んで意見を聞いたことがある。石原は、戦力は根拠地と戦場の距離の二乗に反比例するのが原則であり、我が方の作戦はすべてに攻勢の終末点を越えているので、負けることは明らかであると答えたという。石原は、大東亜戦争の矛盾点の冷静な観察者であつたといえよう。

石原は、日露戦争における日本の勝利は天運によ

ると考えていた。もし、ロシアがもっと頑張っていたら日本は負けていたであろう。広範なアジア地域を対象にする消耗戦、いわゆる国家総動員には重大な誤断がある。仮に、百万の軍を動かさなければならぬとすれば日本は破産のほかなく、もし勝利を得たとしても戦後立つべからざる苦境に陥るであろう。まさに冷静な判断であった。ところが、昭和10年、参謀本部課長になってみると、満州事変当初には日・ソの兵力は大体均衡がとれていたのに、昭和11年には、日本の在満兵力は、ソ連の数分の一に過ぎず、空軍や戦車では比較にならないことを見出して大いに驚く。そこでソ連の兵備と同等の勢力を大陸に置く見地から、兵力の増加を要求する。石原はどれくらい要求を出すとの評判であった。

「星野直樹氏から、大蔵省の局長連が日本財政の実状につき説明したいとのことだったが、その必要はないと返答したところ、重ねて日本の国防につき、できるだけのことを承りたいとのことで、承諾し、山王ホテルの星野氏の部屋で会見した。賀屋、石渡、青木の三氏がおられた。賀屋氏が、まず日本財政について説明された。約束が違うと思ったが私も耐えて終わるまで待っており、私の国防上の見地を赤誠をもって説明した。『現在の日本の財政では無理である』というような抗議の説明や質問があったが、『私ども軍人には明治天皇から【世論に惑わず政治に関わらずただ一途に己が本分】を尽くすべきお諭しがある。財政がどうであろうと国防上必要最小限度のことは断固として要求する』旨お答えして辞去した。私も数年前、百万の軍隊を動かさざるべからずとせば日本は破産の外なく…と日本の競争力を消極的に見ていた見地を心から清算した。」(石原莞爾「戦争史大観」中公文庫)

軍は政府に軍の要求する兵備を要求する。政府はこの兵備に要する国家の経済力を建設すべきである、というのが石原の考えであった。ここにも統帥権独立論の弊害が明らかに出ている。しかし、石原もその後の戦争の推移を見て、経済の建設がそう自由自在に出来ないことは思い知ったのである。

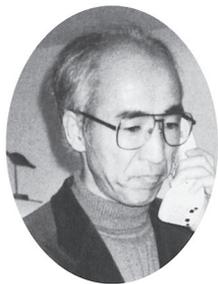


「石原莞爾」(現代書林)の著者、佐治芳彦氏は、次のように述べている。「私は、石原がタイミングを誤った日米軍事対決を防ぐことが出来なかった原因を、当初は、蘆溝橋事件の勃発から日中間の全面対決への拡大を防ぐことが出来なかったこと、近衛・蒋介石和平会談の進言が拒否されたこと、板垣を陸相にしながら次官に石原を据えられなかったこと等、杉山・梅津・東条・武藤ラインによるヘゲモニー確保の野心からであると考えていた。しかし、その後、もっと大きい力が石原の追放に働いていたのではないかと考えるようになった。石原の失脚によって、真の利益を得たものは誰か。それは日中戦争を拡大させ、中国大陆に於ける日本の挫折を望んでいたアメリカではないのか。そこに今、何故石原莞爾か、という理由がある。」

近衛文磨は、優柔不断で軍の圧力に屈し、いやいやながら対米戦争にのめり込んで行ったと見られることが多いが、中川八洋氏(「近衛文磨とルーズベルト」PHP)によると、近衛は、河上肇の教えを受け、また、尾崎秀実のようなソ連同調者を周囲に集めて、ソ連の影響下、英米勢力を東亜から駆逐することを目指していた。陸軍の北進を封じ、海軍に対英米戦争を推進させ、「蒋介石を相手(あいて)とせず」と日中戦を泥沼化し、平和主義の昭和天皇を封じ込め、国内では計画経済体制(新体制)へ暴走するとともにソビエト共産党に似た大政翼賛会を組織した。こう見ると、不可解な昭和十年代の歴史的諸事実に腑に落ちる点が多いのである。東条を便利な道具とした近衛にとって、石原は邪魔な存在であり、特高の監視付きで、郷里山形に追放したこともよく理解できる。

「南と北」

ギャラリー 村岡代表 村岡 武司



江差の五月は江戸にもない、と言われた時代があった。潮にのって押し寄せる産卵期の鯨の群がもたらした賑わいを表現したものだ。しかし、五月の函館だって悪くはない。分厚い財布を持った観光客が北海道全域から押し寄せてくるのだから。

本当に多くの人たちがやってくる。親子、恋人、仲間といった群が怒濤のように押し寄せてくる。北海道最南端の都市函館をめざしてやってくる。北海道の黄金週間は函館の黄金週間といっても良いくらいだ。

これらの人々が何を求めてやって来るかという、その主たる理由に桜の開花がある。桜の花ならその地その地で必ず開花するわけで、多くの時間やおカネを費やして迎えに行くまでもないこと、暫し待てばよさそうなものと思われる。だがそれが出来ない。もちろん国民の祝日がかたまった週間が、桜の開花時期と重なるという幸運もあるにはある。しかし、雪と氷に数か月のあいだ閉じこめられた人たちが待ちかねたように南に向かって多大な関心を示す気持ちは解らないではない。

日本列島は北半球に属している。当然、気温の上昇は南より北へと北上する。またその逆に気温の低下は南下ということになる。簡単に言ってしまうと春と夏は北上で、秋と冬が南下ということになる。稲作をはじめとする農耕で生存し続けてきたこの国の人々にとって何よりも気になるのが降雨と気温である。冬が終わり、次第に上昇し続ける水温と気温は豊かな秋の収穫を予感させる大変気になる出来事なのだ。桜前線の北上はまさにそれを視覚化できる出来事というわけだ。黄金週間に桜の開花を求めて函館に人びとが押し寄せる行動は本州から北海道に移住した人達の遺伝子の記憶が蘇ったという事なのであろう。

北海道と本州の間に横たわる津軽海峡。明治の英国人、トーマス・ライト・ブラキストン。彼はこの海峡を境に、北と南の生態系がまったく異なることを発見し、それをブラキストンラインと名付けた。しかし、そのブラキストンラインを挟んで、食料採取法も

決定的に違っていったのだ。明治維新を迎えるまで、北海道は松前藩と呼ばれていたが松前藩では稲作農耕は行われていない。狩猟採集が主たる生活維持システムであった。一方、津軽海峡の南の人びとは、限られた空間で限られた人びとが農耕を中心に生活が営まれていた。生産と消費、廃棄が限定された地域で行われ、長い間その生態系が維持されたわけだ。

明治に入って、海峡の北側には、西洋の近代農業技術が持ち込まれた。効率よく、農産物を生産しつづけるそのシステムを南の人は羨望の目をもって見たに違いない。今風に言えば、持続することに主眼をおくシステムと、生産拡大を主眼とするシステムとがブラキストンラインを挟んで存在したということである。

青函トンネルが開通して、函館と青森がとても近くなったと言われている。私も青森の人びとと語り合う機会が以前にも増して多くなった。話をして感じるのだが、青森の方々は自分たちは北のはずれに住んでいると表現する。極寒の風土に数千年押し込められてきたという言い方もする。しかし、我々函館に住む人間は、南のはずれに住んでいるという意識が強い。意識の上で、妙な逆転現象があるのである。より北にいる人間が南に住んでいることを意識し、より南にいる人間が、北に住んでいることを意識しているという認識の違いが交錯しているのである。

国土庁は、青函両地域合わせた人口が百万人ということで、青函ツインシティ構想を提案している。しかし、その住んでいる土地に対する意識にこれほど価値の逆転が見られる両地域に、共通の認識を定着されるのは至難の業。平準化にはまだまだ多くの時間が必要なのではないだろうか。しかし、大切なことは他にある。それは、安易に両者の平均値を求めるのではなく、逆に両者の違いを明確に意識することだ。

異なった文化が混じり合った時、そこにはより魅力的な、素晴らしい文化が生み出されるわけだ。北と南、進歩と持続、狩猟採集から近代農業への急変と伝統的稲作農耕などこれら相対する文化の間から一体何が生み出されてくるのか、とても興味深い。

源氏物語アカデミー

文化の薫り高い地域づくり——福井県武生市

(財)ほくとう総研専務理事
高田 喜義

1. 武生市は越前国以来歴史に彩られたまち
武生市（人口70,421人）は、福井県のほぼ中央、武生盆地に位置し、周辺を1市4町2村に囲まれた南越地方の経済、文化、交通の中心地である。

当市の主要産業は、伝統の越前打刃物を始め、半導体、シリコン、セラミック等の先端産業が中心で工業出荷額は県内第1位をほこっている。

武生市の歴史は古く、上古から現在の福井県から新潟県までを含む「古志国」の中心地として開け、大化改新のとき「越前国」の国府が置かれてからは北陸の政治、文化、軍事の拠点となり、中世には源平、南北朝の内乱の舞台となり、戦国期には信長と浅井、朝倉の争いの場になるなど多彩な歴史に彩られたまちである。

また、万葉の歌人大伴家持をはじめ、いにしえから日本史に名を残すような多くの著名な文化人、武将が訪れている。

なかでも「源氏物語」の作者紫式部は、越前国の国主として赴任した父藤原為時にとまわられて明徳2年（西暦996年）にこの地に来遊し、17～18才の多感な青春期を過ごし、のちの「源氏物語」の創作活動に影響を及ぼしたと言われている。

2. 武生市の地域づくり

武生市のある丹南地域は、平成5年に「地方拠点都市」に指定され、当市はその中心都市として産業および文化面でリーダー的役割を果たすことが期待されている。

武生市は、前述の古い歴史的背景と近代産業の調和をはかった「歴史と文化を活かした市街地の再生計画」をテーマに、“紫式部と出会う菊とハイテ

クのまち武生”をキャッチフレーズに受け継がれてきた伝統文化を見直し、それをもとに新しい文化を創造しようという歴史、文化にこだわった町づくりを進めている。

その一環として昭和61年に多くの専門家の時代考証を仰いで約2ヘクタールの平安朝の寝殿造庭園「紫式部公園」を整備している。

また、当市は郷土の歴史や文化、自然への愛着の深い土地柄で、なかでも過去の地域の歴史を見直そうという機運が高く、様々な取り組みがなされており、「源氏物語アカデミー」をはじめ「菊人形展」など市民主導による様々な文化事業が行われ、「歴史文化の薫り高い街づくり」に寄与している。

3. 「源氏物語アカデミー」誕生の背景

「源氏物語アカデミー」の前身は、紫式部が武生市において青春時代のひとときを過ごしたことを後世に語り伝えようと昭和38年に市内有志3名によって結成された「紫式部顕彰会」である。

同顕彰会は、その後会員を増やしながらか講演会、紫式部歌碑建立、文化賞の授与等の活動を続けてきたが、昭和63年に

市制40周年施行記念事業としてこの顕彰会を中心とする市民グループと行政とが協力して実行委員会を結成し、「第一回源氏物語アカデミー」を開催し、約4,000人の参加者を集めた。

市民および県内外の源氏物語愛好家、古典文学ファン、歴史ファンを集めて開催してきたこの「源氏物語アカデミー」は今年で9回を数え、武生を代表するイベントとして定着している。

実行団体の「源氏物語アカデミー委員会」は現在、



会員41名で構成されている。当初民間ボランティアと行政とでスタートしたアカデミーもその後商工会議所や青年会議所、観光協会、物産協会等も巻き込み全市的組織となっている。



4. 「源氏物語アカデミー」の活動

「源氏物語アカデミー」は、広く市民一般に共感を得る“見る・聴く・味わう”イベントとして毎回、源氏物語に因んだテーマを選定してプログラムが組まれ、源氏物語の世界の奥の深さやおもしろさが味わえるようになってきている。

第1回からテーマは、『彩』『薫』『遊』『華』『炎』『道』『装』『祈』で次のような事業を行っている。

〔見る〕 女人舞楽と雅楽による「平安の舞」、
「蹴鞠」、「平安衣装の色復元」、「野焼きによる作陶」、「今様」の公演、源氏物語54帖絵展

〔聴く〕 講演会（瀬戸内寂聴、俵万智、ドナルド・キーン、田辺聖子、杉本苑子ほか）、
講義（足利健亮、龐谷寿、清水好子ほか）、
「声明」の公演

〔味わう〕 平安時代の貴族の食事「紫きぶ御膳」、
平安時代のチーズ「蘇」の再現

また、平成8年には紫式部が武生に来遊して丁度千年目にあたることから記念事業として「紫式部国司下向の旅」と題し、京都府宇治市を出発点とし琵琶湖をわたって越前国府を終点とする時代行列を実施している。



5. 「源氏物語アカデミー」の意義、効果

(1) 地域の誇りとイメージアップ

アカデミーの活動は、紫式部その人を地域文化の象徴として地域と住民を結びつける媒体とすることにより、地域住民の地域に対する誇り、精神の一体感の醸成に役立っている。

また、全国から多くの参加者が集まり、マスコミに取り上げられることにより、武生市の越前国府以来の歴史、文化、伝統産業などが今に受け継がれ、発展していく様が全国に発信され、地域のPR、イメージアップに貢献している。

(2) 活動の広域的拡がり

イベント開催に際し、丹南地域の市町村の伝統産業（今立町「越前和紙」、宮崎村「越前焼」、鯖江市「繊維製品」等）や伝統芸能を取り入れている。

また「紫式部国司下向の旅」を通して宇治市をはじめ滋賀県浅井町、福井県敦賀市、今庄町等の道中の市町村と歴史街道整備の観点から交流をより深める動きがでてきている。

(3) 経済的効果

「源氏物語アカデミー」の開催により、延べ2～3,000人の参加者があり、これらの消費効果に加えて和菓子やテレホンカード、ブランド米に紫式部が使われるようになってきた。

(4) 「王朝文学」を「市民文学」へ

市民主導のアカデミーが日本文学の原点ともいえる「源氏物語」「紫式部」の研究を重ね、掘り下げることにより“難解な王朝文学”を“市民文学”として位置づけ、地域の文化度の向上に貢献している。

6. 今後の課題と展望

当初一部の人々のマニアックな活動から端を発した「源氏物語アカデミー」だが、行政の「紫式部公園」「式部来遊千年祭」の支援をえて行政と民間の共同プロジェクトとして定着している。

行政は、「歴史と文化を活かした街づくり」を掲げて橋のレリーフ等に源氏物語を用い、商店街のアーケードやシャッターにも紫式部が登場しているが、総体的に式部や源氏物語に出会えるのはイベントの期間中で地域CIのコンセプトとしては物足りない面があることは否めず、今後紫式部記念館的な施設の整備が課題であろう。

「源氏物語アカデミー」は平成8年度国土庁地域づくり表彰で全国地域づくり協議会会長賞 および「北海道東北開発公庫総裁賞」を受賞した。

事務局から

各種出版物刊行のお知らせ

ほくとう総研・北東公庫では、96年8月以降以下の図書を刊行致しております。何れも地域開発に携わっておられる方にとっては必携の書といえますので是非お求め下さい。

地域づくりと第三セクター ～失敗のない第三セクター活用～

高田喜義（(財)ほくとう総研専務理事）著
(財)北海道東北地域経済総合研究所 編集協力
株式会社ぎょうせい 発行

B6版 定価1,800円

一般書店にて販売中（直接ほくとう総研宛お申込みをいただいで結構です。）

地域指標ハンドブック 1996年版 ～北海道東北地域のすがたとうごき～

北海道東北開発公庫・(財)北海道東北地域経済総合研究所 編集
(財)北海道東北地域経済総合研究所 発行

B5版 定価1,500円

政府刊行物センターで発売中（直接ほくとう総研宛お申込みをいただいで結構です。）

100の解説 東北経済 ～やさしい地域経済の見方～

北海道東北開発公庫 監修
(財)北海道東北地域経済総合研究所 編集
大蔵省印刷局 発行

A5版 定価1,500円

政府刊行物センター、東北地域主要書店などで販売

◆本誌へのご意見、ご要望、ご寄稿をお待ちしております

本誌に関するお問い合わせ、ご意見ご要望がございましたら、下記までお気軽にお問い合わせ下さい。

また、ご寄稿も歓迎いたします。内容は地域経済社会に関するテーマであれば、何でも結構です。詳細につきましてはお問い合わせ下さい（採用の場合、当財団の規定に基づき薄謝進呈）。

〒100 東京都千代田区大手町1-9-3 公庫ビル
ほくとう総研総務部 NETT編集部
TEL.03-3242-1185(代) FAX.03-3242-1996

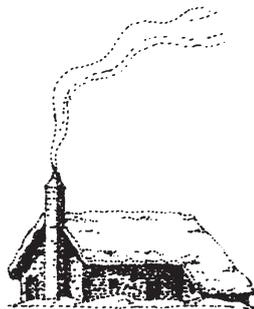
HOKUTOU DIARY 平成8年10月～12月

★ほくとう総研のおもな出来事、活動内容についてご紹介します。

- 平成8年10月17日～18日 第2回地域政策研究会開催
(初山別村～留萌・宗谷支庁)
しよさんべつ
- 10月24日～25日 第3回地域政策研究会開催
(西興部村～網走支庁)
にしおこっべ
- 10月29日～30日 第4回地域政策研究会開催
(忠類村～十勝支庁)
ちゅうるい
- 11月8日 秋田地域問題研究会パネラー派遣
(秋田市・高田専務理事)
- 11月14日 北東公庫創立40周年記念'96地域シンポジウム開催
<札幌会場>
テーマ：北海道の産業戦略を考える
- 11月19日 過疎地域活性化シンポジウムパネラー派遣
(札幌市・高田専務理事)
- 11月21日 国土庁「地域づくり表彰審査会」(富山県高岡市)
- 11月26日 秋田銀行講演会講師派遣(秋田県本荘市・高田専務理事)
- 11月29日 北東公庫創立40周年記念'96地域シンポジウム開催
<仙台会場>
テーマ：2050年の東北
- 12月16日 第2回当財団懇話会開催
- 12月25日 NETT17号発行

編集後記

20世紀も残すところ1500日を切りました。そう
した中で、「北東公庫創立40周年記念'96地域シンポ
ジウム」を開催しました。両会場とも300名を超す
方々のご参加を得、盛況裡に幕を閉じることがで
きました。札幌会場では「北海道産業の活性化の
ためには、道民自身が危機感を持ち具体的な行動
に移すべきだ(堤先生)」あるいは仙台会場では
「昔あった暮らしと命の知恵、勇気、愛情などを今
掘り起こしするときです。過去を大事にしないと
ころには発展がありません(木村先生)」等々示唆
に富んだご意見が多々ありました。何れもこの場
かぎりに終わらせることなく、今後の我々を含め
皆様の活動の規範とすべきものと思います。(TW)



財団法人 北海道東北地域経済総合研究所機関誌

NETT

No.17 1996.12

編集・発行人◆伊井 孝義

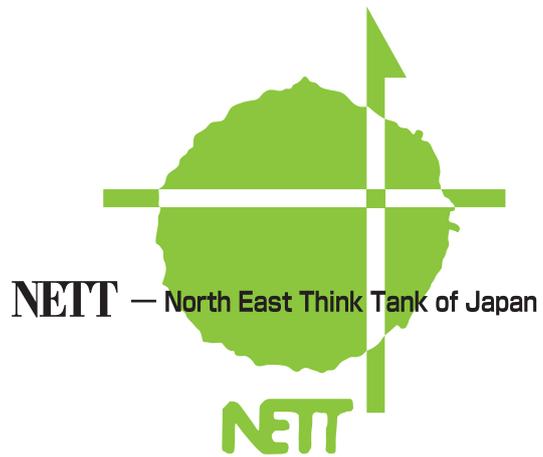
発行

(財)北海道東北地域経済総合研究所

〒100 東京都千代田区大手町1-9-3

TEL.03-3242-1185 FAX.03-3242-1996

禁無断転載



財団法人 北海道東北地域経済総合研究所

〒100 東京都千代田区大手町1丁目9番3号(公庫ビル5F)
TEL.03-3242-1185(代) FAX.03-3242-1996